

中学生の自己実現を考える(2)

—親の自己実現及び養育態度との関連から—

小坂圭子・山崎 晃

(2001年9月30日受理)

Self-actualization of junior high school students (2):
An analysis of the relationships among self-actualization of child,
self-actualization of parents, and mutual cognition of parental rearing behavior

Keiko Kosaka and Akira Yamazaki

The purpose of the present study was to identify the relationships among self-actualization of junior high school students, self-actualization of their parents, and mutual cognition about parental rearing behavior. Self-actualization Scale and Parental Behavior Inventory (EICA) were administered to 83 junior high school students (44 males and 39 females) and their parents. EICA consists of four factors: Emotional support, Identification, Control, Autonomy. Results of factor analysis showed that self-actualization of junior high school students was composed of seven factors. Multiple regression analysis revealed that self-actualization of fathers had a greater influence on self-actualization of their children than that of mothers, and that Emotional support of mothers promoted self-actualization of their children while Control of mothers inhibited it. It was suggested that fathers play a significant role in self-actualization and mothers play an important role in mental support for their children.

Key Words: self-actualization, parental rearing behavior, emotional support, parents-child relationship, junior high school students

キーワード: 自己実現, 養育態度, 情緒的支持, 親子関係, 中学生

問 題

数々の衝撃的な事件が報道され、中学生の抱える暗い衝動に目が向けられるようになってやや経つ。いじめ(佐藤, 1995), 不登校(北村, 1995), 非行(森田・佐藤・桑原・中村・岡田・阿部・庄司・小田, 1995)など中期・長期的に持続する症状から、すぐにキレル、ムカつくといった突発的な反応も含め中学生の問題的な行動については、国・地方公共団体等においても福祉・教育面における緊急対応策が求められている(辰見, 2000)現状である。中学生の問題的な行動の要因については、心理学、医学、教育学などの視点から数多くの研究が実施されているが、中学生の内面をとらえようとする動きの中では、現代は中学生が自己を肯定し、自己実現に向かうことが難しいとする指摘が見

受けられる(佐藤・森, 1998; 吉田, 1998など)。自己実現の達成に関わる問題は現代に特有の現象とはいえないが、現代は自己実現の達成を阻む要因が多様化・複雑化し、要因の同定や対処がこれまでになく困難になっていると考えられよう。本研究は、中学生が自己実現を目指すときに、彼らを取り巻く環境が彼らにどのように働きかけるのかを探ろうとするものである。中学生の過ごす青年前期は、自意識の確立に伴い自分自身と向き合い始める最初の時期である。そのように自己の内面に向かう一方で、身近な他者との関わりから自分の存在を再確認するといったように、自分以外の他者とのつながりにも敏感になる時期でもある。中学生の主たる生活の場は家庭と学校であり、彼らが生活を共にする身近な他者としては家族、友達、教師などが考えられる。

中学生が自分自身と向き合い自己を確立していくうえで、臨床的な立場からは親の果たす役割の重要性が強調されており(山添, 1997など), 多くの研究が, 中学生から高校生にかけて, 親の養育態度が青年の自己形成に影響を及ぼすことを示している。例えば, 親が自分の自律性を尊重してくれると中学生が受け止めているような親子関係の中で, 男女ともに同一視のメカニズムが生じること(森下, 1982), 中学生は父親や母親の情緒的支持が強いほど自己を承認したり信頼することができていること(森下, 1990), 拒否的・強制的な養育態度の母親を持つ高校生はそうでない高校生に比べて生きがいを持ちにくいこと(吉田, 1994), 非行少年は高校生に比べて, 父親, 母親ともに過干渉的・拒否的・懲罰的な養育行動であると強く認知し, 支援や本人の意思の尊重といった養育行動についてはあまり認知していないこと(門脇・染矢・高橋, 1998)などが明らかにされている。

中学生の自己実現に親自身の自己実現がどのように関わるのかを検討した小坂・山崎(2000)では, ①中学生, 父, 母によって自己実現の内容が異なること, ②親が自己実現的に生きることと中学生がそうした親の姿勢をそのまま受け継いでいくこととは直結しないこと, ③中学生の自己実現達成において, 父親はモデル/反面モデルとして存在する一方で, 母親はモデルというよりも中学生をバックアップする援助的な役割を担っている可能性などが示された。つまり, 親が1人の人間として自己実現的に生きることと, その親の姿を中学生が自らの自己実現達成の資源とすることは複雑な関連にあるわけである。このように自己実現達成における親子間のギャップについては, 親の自己実現的に生きる姿勢が子である中学生への養育態度としてどのように現れているのかという問題提起が解明の糸口になるかもしれない。例えば, 親が自己実現的に生きることと子どもにとって望ましい養育態度で子どもに接することとは必ずしも一致するわけではない可能性も考えられるのである。上述にもあるように, 中学生の自己形成に及ぼす親の養育態度の影響は見過ごせない。従って本研究では, 親の自己実現的姿勢が子どもの自己実現に反映される経路を仮定した場合に, その介入要因として親の養育態度を想定し, 探索的に検討する。

加えて, 母親が父親とは異なり中学生に対して援助的・支持的な役割を担っている可能性(小坂・山崎, 2000)について, 父母の養育態度と中学生の自己実現との関わりを検討することによって明らかにする。本研究の目的は, 中学生の自己実現の在り方を, 親自身の自己実現, 及び親子による親の養育態度の認知との

関連からとらえることである。本研究ではマズロー(1964, 1971)の考え方に従い, 自己実現を「人が, 自分の中にある可能性や能力を最大限に開発・発揮し, 人間的に成長したい, 個性を生かし創造的に価値を実現し, 充実感や生きがいを感じたいと思う欲求」であるととらえる。

方 法

調査対象 広島県内の中学校2年生2クラスの男子44名, 女子39名とその親を対象に調査を実施した。

調査時期 調査は1999年7月上旬に実施された。

調査内容

①自己実現尺度 中学生用, 親用とも, 村山ら(村山・山田・峰松・冷川・亀石・二藤部・深尾, 1982; 村山・山田・峰松・冷川・亀石・二藤部, 1983; 村山・山田・峰松・冷川・亀石, 1984)の自己実現尺度10尺度60項目を, 内容が重複しておらず且つ項目の表現がわかりやすいという基準を満たす30項目に精選した(資料参照)。これらの項目に対して, 自分に当てはまると思う程度を「はい(5点)」から「いいえ(1点)」までの5段階で評定を求めた。

②中学生用/親用親子関係診断尺度 EICA 中学生用は辻岡・山本(1976)を, 親用は小高(1994)を参考に作成した。両者とも, 「情緒的支持(Emotional support)」「(父親または母親が子どもを愛し, 子どもを気持ちのうえで支持する傾向を測定するもの), 「同一化(Identification)」「(父親または母親が子どもと一体感を持ち, 親の延長線上あるいは分身として子どもを考える傾向を調べるもの), 「統制(Control)」「(父親または母親の子どもへのしつけ, 訓育, 勉学への厳しさ等, 親からの超自我の圧力を調べるもの), 「自律性(Autonomy)」「(父親または母親が子どもの人格を認め, 自主性を尊重し, 子どものことは子ども自身に任せようとする傾向を調べるもの)の4尺度各10項目計40項目から構成される(資料参照)。これらの項目に対して, 自分に当てはまると思う程度を「はい(5点)」から「いいえ(1点)」までの5段階で評定を求めた。自律性のみ“否定”側が高得点となるように採点した。手続き 中学生用, 父親用, 母親用の質問冊子をそれぞれ作成し, クラス担任を通してクラス毎に一斉配布して約2週間後に一斉回収を求めた。

結果と考察

(1) 中学生及び親の自己実現の因子構造

小坂・山崎(2000)に従い, 中学生の自己実現に関

Table 1 親子別にみた自己実現因子内容

	中学生	父親	母親
因子1	自分自身の肯定	他者の受容	自分の弱点の受容
因子2	自分の弱点の受容	自己志向	強迫
因子3	自己志向	自分の弱点の受容	自己志向
因子4	率直な自己表現	率直な自己表現	達成志向
因子5	達成志向	積極的に生きる	現状の肯定
因子6	積極的に生きる	自己主張	率直な自己表現
因子7	他者の両極的評価		

注) “強迫”は強迫観念にとらわれていない場合に自己実現が達成されていると;

して、欠損値のない82名(男子43名,女子39名)の回答を対象に主因子法,バリマックス回転による因子分析を行った。固有値落差および解釈可能性を考慮し,寄与率の大きい7因子を対象に再度同様の因子分析を行ったところ7因子が抽出された。次に,父親の自己実現に関して,欠損値のない74名の回答を対象に主因子法,バリマックス回転による因子分析を行った。固有値落差および解釈可能性を考慮し,寄与率の大きい6因子を対象に再度同様の因子分析を行ったところ6因子が抽出された。また,母親の自己実現に関して,欠損値のない82名の回答を対象に,主因子法,バリマックス回転による因子分析を行った。固有値落差および解釈可能性を考慮し,寄与率の大きい6因子を対象に再度同様の因子分析を行ったところ6因子が抽出された(Table 1)。

(2) 親の養育態度に対する中学生の認知と親の認知との関連

中学生用/親用親子関係診断尺度 EICA 各4尺度の平均得点と標準偏差を Table 2 に示す。それぞれ,中学生の父親の養育態度に対する認知(対父),中学生の母親の養育態度に対する認知(対母),父親の自分の養育態度に対する認知(父),母親の自分の養育態度に対する認知(母)となっている。親子ともに質問冊子が回収された72名の回答をもとに,中学生対父,中学生対母,父,母各4尺度計16尺度について尺度間相関行列(16×16)を求めた(Table 3)。

Table 2 親子関係診断尺度 EICA 各4尺度の平均得点と標準偏差

	平均得点	標準偏差
対父・自律性	3.09	.89
対父・統制	2.69	.87
対父・同一化	2.61	.77
対父・情緒的支持	3.09	.89
対母・自律性	3.04	.87
対母・統制	2.56	.74
対母・同一化	2.77	.81
対母・情緒的支持	3.51	.77
父・自律性	3.56	.68
父・統制	2.74	.68
父・同一化	2.98	.67
父・情緒的支持	3.68	.54
母・自律性	3.74	.72
母・統制	2.68	.71
母・同一化	2.97	.69
母・情緒的支持	3.97	.53

注) N=72であり,最高得点は5点である。

中学生が認知している父親の養育態度と父親自身が認知している自分の養育態度とは,4尺度とも正の相関関係にあった。つまり,自分に対して父親が(自律性)を認めていないと感じている中学生の父親は,自

Table 3 親子関係診断尺度 EICA の尺度間相関行列

	対父・自律性	対父・統制	対父・同一化	対父・情緒的支持	対母・自律性	対母・統制	対母・同一化	対母・情緒的支持	父・自律性	父・統制	父・同一化	父・情緒的支持	母・自律性	母・統制	母・同一化	母・情緒的支持
対父・自律性		.53***	.26*	.26*	.58***				.39**	.24*			.30**			
対父・統制			.35**	.29*	.50***				.29*							
対父・同一化			.76***													
対父・情緒的支持					.51***	.39**				.28*	.25*					
対母・自律性						.48***	.37**		.40**	.31**		.27*	.28*			
対母・統制									.34**							
対母・同一化									.58***							
対母・情緒的支持																.36**
父・自律性																.39**
父・統制																.42***
父・同一化																.59***
父・情緒的支持																.42***
母・自律性																.23*
母・統制																
母・同一化																
母・情緒的支持																.35**

注) *** p<.001 ** p<.01 * p<.05

身の養育態度について子どもの〈自律性〉を認めていないと認知しているということである。〈統制〉, 〈同一化〉, 〈情緒的支持〉についても同様であり, 各尺度について父親の養育態度に“その傾向が強い”と認知している中学生の父親も同様に, 自分自身に“その傾向が強い”と認知していた。次に, 中学生が認知している母親の養育態度と母親自身が認知している自分の養育態度については, 〈自律性〉と〈同一化〉の2尺度についてのみ正の相関が認められた。母親が自分に〈自律性〉を認めていないと感じている中学生の母親も, 自分の養育態度について子どもの〈自律性〉を認めていないと感じており, また, 母親の同一化傾向が強いと感じている子どもの母親も, 自分自身の同一化傾向の強さを認識しているということである。

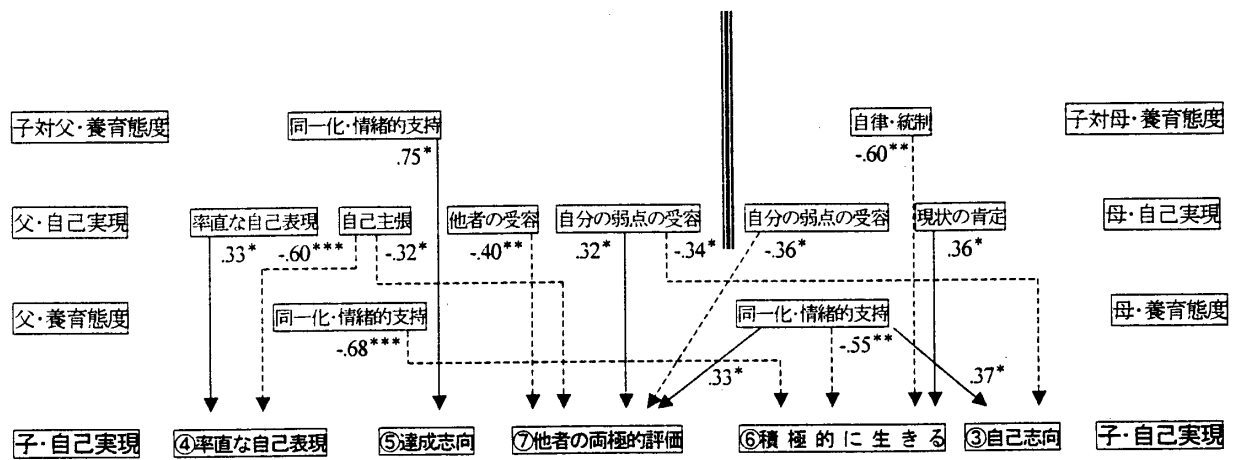
以上の結果から, 以下の2点が指摘される。第1点は, 親の養育態度についての親子の認知はほぼ一致しているということである。その一致傾向は父親の養育態度に対してより顕著であり, 全4尺度について親子の認知に正の相関が認められた。母親では4尺度中2尺度であり, 中学生が母親に対して抱えている養育態度の認知と母親自身が認識している養育態度の在り方とは, 父親に比べるといくらかの隔りがあるようである。第2点は, 〈自律性〉については中学生, 父親, 母親がともに同じ認知をしていることである。つまり, 自分が自律的に生活することに対する不寛容さを対父親に感じている中学生は対母親に対しても同様に感じており, 且つそのように感じている中学生の父親及び母親も子どもの自律に任せた養育を行っていないと認知しているのである。このように中学生, 父親, 母親の3者間に一致した認知傾向が認められたのは〈自律性〉のみであった。〈自律性〉に関しては, 父母ともに

一貫した養育態度で子どもに接しているようである。親から精神的に離脱し自己確立を目指す必要はない第2の個体化の過程 (Blos, 1967) にある中学生にどの程度まで生活上の自律を認めるかという問題は, 親子にとって重要な関心事の一つであることの現れかもしれない。

(3) 中学生の自己実現, 親の自己実現及び親子の養育態度認知との関連

親の自己実現と親子の養育態度の認知が中学生の自己実現に及ぼす影響を推定するために, 父親 (6 因子) 及び母親 (6 因子) の自己実現因子計12因子, 父母の養育態度認知計8因子, 対父母養育態度認知計8因子を説明変数, 中学生の自己実現因子各7因子を目的変数とした重回帰分析を行った。その結果に基づき, 標準偏回帰係数が5%以上の水準で有意になったパスを取り上げダイアグラムに示した (Figure 1)。父母の自己実現から中学生の自己実現に対して見出されたパスの数や傾向は, 小坂・山崎 (2000) の結果とほぼ同様であった。簡潔に述べるならば, 中学生の自己実現は父親の自己実現的生き方により影響を受けることが推測され, また, 親が自己実現的に生きることと中学生がそうした親の姿勢をそのまま受け継いでいくことは必ずしも直結しないようである。更に, 父親が自己実現的に生きる姿勢が, 子どもの同傾向の自己実現を促進すると同時に抑制する傾向が見出された。

次に, 中学生と親による養育態度認知と中学生の自己実現との関連についてであるが, 父親と母親の両方の〈同一化・情緒的支持〉から中学生の自己実現第6因子 (積極的に生きる) に対して負のパスが得られた。子どもに対する同一化や情緒的支持を自覚している父親及び母親の子どもは「自分自身の気持ち・価値観に



注) 標準偏回帰係数が有意なパスのみ図示した。図中の数字は有意な標準偏回帰係数を, 実線矢印は正のパス, 破線矢印は負のパスを示す。

***p<.001, **p<.01, *p<.05

Figure 1 親の自己実現, 養育態度, 及び中学生の自己実現のパスダイアグラム

したがって生きる」ことができていないようである。中学生の過ごす青年前期が、親からの精神的な離脱を希求し、理想的な親を求めての現実の親への批判(加藤, 1987)が噴出する時期であることを考慮するならば、積極的に自分自身の価値観を確立しようとしている時に、同一化を迫る親に対して、中学生がいくらかの息苦しさを覚えていることも想像できる。また、中学生が親の養育態度として実際に感じている(同一化・情緒的支持)からは同様のパスが得られていないことから、父親や母親自身が示している(同一化・情緒的支持)が必ずしも中学生にそうと実感されていない可能性にも注意を払う必要があるかもしれない(同一化)については父親・中学生間及び母親・中学生間の認知に正の相関が認められているが)。例えば、母親が中学生の自律を重んじず彼らの生活を統制していると中学生が実感している場合に(積極的に生きる)姿勢が阻害され、その一方で、中学生が父親から情緒的な支援を受けていると実感している場合には(達成志向)が促進されるという想像するに難くないパスが得られたことから、中学生の自己実現への影響力を考えるうえでは、中学生自身が親の養育態度をどうとらえているのかが重要となってくるようである。興味深いことに(同一化・情緒的支持)において、父親自らの認知からは(積極的に生きる)への負のパスが、中学生による対父養育態度認知からは(達成志向)への正のパスが得られ、やはり両者の効力の違いが明らかに認められた(父親・中学生間の養育態度認知については全尺度において正の相関が得られたが)。この結果も、中学生の自己実現に資する親の養育態度を考える場合に、父親自身が認知する養育態度と中学生が認知する養育態度との間にギャップが存在することを示唆している。親自身による養育態度認知から中学生の自己実現への正のパスは母親においてのみ認められ、母親の養育態度認知(同一化・情緒的支持)から中学生の自己実現第3因子(自己志向)及び第7因子(他者の両極的評価)に対して正のパスが得られた。他者環境の中に自分を埋没させてしまうことなく、他者とは異なる自分を自覚し、そうした違いを持つ自分や他者の存在を深く受け入れていくうえでは、母親からの自覚的な情緒的支持が重要な機能を果たすようだ。

以上をまとめると、父親と母親とは子の自己実現に対して異なる役割を分担しており、第二反抗期に相当するこの時期を考慮に入れると、中学生にとって父親がある種のモデル/反面モデルとして存在している一方で、母親は中学生が自己実現を達成していくうえでの直接的なモデルになるというよりも、子どもの気持ちに対する共感や理解に基づいた情緒的なつながりを提

供することで、中学生の自己実現の達成をサポートする役割を担っていることが示された。この傾向については、小坂・山崎(2000)にも述べられているが、特に母親の支持的な役割については推測の域を出ないものであった。本研究において、自己実現モデルとしての父親の存在と中学生の自己実現の達成を精神面からサポートする母親の存在とがより明確に示され、小坂・山崎(2000)の考察を裏づける結果が得られたといえよう。

討 論

本研究では、親の自己実現的生き方が子どもの自己実現に反映される経路を仮定した場合に、その介在要因として親の養育態度を想定し、探索的に分析及び検討を試みた。

まず、親子による親の養育態度の認知について相関分析を行ったところ、親の養育態度についての親子の認知はほぼ一致しており、その傾向は父親の養育態度に対してより顕著であること、そして、中学生が父母両者に一貫した養育態度であると感じている一方で、その父母両者自身も中学生が感じている通りの養育態度で接していると認知しているのは(自律性)のみであることが示された。内的にも外的にも世界を広げようとしている中学生に(自律性)をどこまで認めるかについては唯一不変の回答があるわけではなく、中学生とその親との間に摩擦を生み出す難題の一つであると思われる。

次に、中学生の自己実現と親の自己実現及び親子の養育態度認知の関連を明らかにすることを目的として重回帰分析を行った結果、中学生の自己実現は父親の自己実現的生き方により影響を受ける一方で、母親の養育態度における情緒的なサポートが中学生の自己実現の達成を支えていることが示された。前者は小坂・山崎(2000)を裏づける結果であり、また後者によって小坂・山崎(2000)の結果から推測された母親の役割が確認された。その一方で、特に(同一化・情緒的支持)に関して父親・中学生間に認知のずれが認められた。本研究では、親子間の自己実現のギャップを補償するものとして親の養育態度を取り上げたのであるが、自己実現に影響を与える養育態度についても親子間の認知においてギャップが存在するようである。このように自身の家庭風土を認識するうえで家族の成員間にギャップが認められるのは珍しいことではないらしい。西出・夏野(1997)によれば、母親がひとりよがり的に家族を肯定的に評価している場合はかえって中学生の抑鬱感を増加させる可能性を指摘し、親が中学生の

立場に立って家族システム機能を見つめ直す必要性を説いている。また、平山(2001)は、中学生の神経症傾向が最も高くなるのは、父親が自分の家庭関与を高く自己評価している一方で母親は低く評価している不一致群であったと報告している。西出・夏野(1997)や平山(2001)が報告したギャップの程度は家族によって異なるものであり、中学生の子どもとその親の間に一般的に認められるものとして提起されているわけではないが、中学生とその親が直面する課題として家族成員間の認識のずれがあることを抽出することは可能である。こうしたギャップがもたらす制約の範囲や程度についての、理論的、実証的探索が今後の課題として挙げられる(例えば、中学生の親子間に特有なのかどうか、ギャップの効用は考えられないのかどうかなど)。この点とも関連するが、本研究では親から子へと自己実現的生き方が伝えられる経路上の介在要因として親の養育態度を想定したわけであるが、養育態度の介在性の解明に最も適した分析方法を用いて検討したとは言い難い。次に取り組むべきは、本研究で提起された中学生の自己実現、親の自己実現、そして親子双方による親の養育態度認知の関連性を反映したパスモデルを構築し、そのモデルの妥当性を確認するという作業である。

引用文献

- Blos, P. 1967 The second individuation process of adolescence. *The Psychoanalytic Study of the Child*, **22**, 162-186.
- 平山聡子 2001 中学生の精神的健康とその父親の家庭関与との関連：父母評定の一致度からの検討 発達心理学研究, **12**, 99-109.
- 加藤隆勝 1987 青年期の意識構造：その変容と多様化 誠信書房
- 北村陽英 1995 中学生不登校 臨床精神医学, **24**, 1385-1391.
- 小坂圭子・山崎晃 2000 中学生の自己実現を考える：親の自己実現との関連から 広島大学教育学部紀要 第三部(教育人間科学関連領域), **49**, 373-381.
- 小高恵 1994 親子間の認知構造の因子分析的研究 心理学研究, **65**, 95-102.
- マズロー, A. H. 上田吉一(訳) 1964 完全なる人間 誠信書房
(Maslow, A. H. 1962 *Toward a psychology of being*. New York: Van Nostrand.)
- マズロー, A. H. 小口忠彦(監訳) 1971 人間性の心理学 産業能率大学出版会
- (Maslow, A. H. 1954 *Motivation and personality*. New York: Harper & Row.)
- 門脇真帆・染矢俊幸・高橋三郎 1998 非行少年における親の養育行動認知の特徴：EMBU 調査票を用いた高校生との比較 精神医学, **40**, 253-261.
- 森下正康 1982 中学生における親の養育態度と対人特性の同一視 教育心理学研究, **30**, 52-57.
- 森下正康 1990 親の養育態度と子どもの自己受容の発達 日本教育心理学会第 32 回総会発表論文集, 157.
- 森田展彰・佐藤親次・桑原寿美・中村俊規・岡田幸之・阿部恵一郎・庄司正美・小田晋 1995 臨床精神医学, **24**, 1413-1425.
- 村山正治・山田裕章・峰松修・冷川昭子・亀石圭志・二藤部里美・深尾誠 1982 自己実現尺度で測る精神的健康(1) 健康科学, **4**, 177-184.
- 村山正治・山田裕章・峰松修・冷川昭子・亀石圭志・二藤部里美 1983 自己実現尺度で測る精神的健康(2) 健康科学, **5**, 1-9.
- 村山正治・山田裕章・峰松修・冷川昭子・亀石圭志 1984 自己実現尺度で測る精神的健康(3)：項目とフォームの決定 健康科学, **6**, 45-57.
- 西出隆紀・夏野良司 1997 家族システムの機能状態の認知は子どもの抑鬱感にどのような影響を与えるか 教育心理学研究, **45**, 456-463.
- 佐藤学・森薫 1998 窒息状況の学校も子どもも救える 論座, **37**, 12-23.
- 佐藤泰三 1995 いじめ 臨床精神医学, **24**, 1401-1406.
- 辰見敏夫 2000 調査概要 中学生の問題行動研究会(編) 平成 11 年度児童環境づくり等総合調査研究事業研究報告書：中学生の問題行動の背景にある心理・社会的要因に関する調査研究 Pp. 1-7.
- 辻岡美延・山本吉廣 1976 親子関係診断尺度 EICA の作成：因子的真実性の原理による項目分析 関西大学社会学部紀要, **7**, 1-14.
- 山添正 1997 「父性」のたてなおし「母性」のみなおし：子どもの自我発達への援助 ブレーン出版
- 吉田千秋 1998 「新しい荒れ」と大人社会の歪み 日本子どもを守る会(編) 子ども白書：「揺れる社会」と「子どもの事件」からの問かけ 草土文化 Pp. 22-27.
- 吉田勝也 1994 高校生における生きがい尺度と母親の好ましくない態度との関連について 精神医学, **36**, 411-414.

(指導教官：山崎 晃)

付 記

本研究は文部省(当時)科学研究費補助金基盤研究(C)

中学生の自己実現を考える(2)

(代表：山崎晃)の研究の一部として実施されたものです。調査にご協力いただきました中学校の先生方、

生徒の皆様、ならびに保護者の皆様に心より感謝申し上げます。

資 料

自己実現尺度 (親子兼用)

①現在の自分の肯定 (Self-Acceptance)	1. 私は過去を後悔することが多い。(－) 2. 私は少しくらい批判されても、あまり自信を失わない。(＋) 3. 私はいつも相手の気持ちが気になる。(－)
②達成志向 (Achievement Orientedness)	4. 私にとって将来どう生きるかが最も重要である。(－) 5. 私は何か意味のあることをしなければならないと いつも思っている。(－)
③積極的に生きる (Way of Positive Life)	6. 私は「人生は素晴らしいなあ」と感じた瞬間がない。(－) 7. 私は自分の中にある矛盾を受け入れることができる。(＋) 8. 私は見返りがなくても他の人のために 何かをすることができる。(＋) 9. 私は自分自身の気持ち・価値観にしたがって生きている。(＋)
④自己主張 (Self-Assertion)	10. 相手がどう思おうと、私は好意を伝えることができる。(＋) 11. 私は自分の意見をはっきり主張できる。(＋)
⑤率直な自己表現 (Genuineness)	12. 私は他の人と交際するとき感じたままを言うことは よいことだと思う。(＋) 13. 二人の人がうまくやっていくためには、 自由に自分の気持ちを表現しあうのがよい。(＋) 14. 状況をあれこれ考えるよりも、率直な気持ちをだすほうが 大切なことがよくある。(＋)
⑥両極性の統合 たてまえの不条理さに対する寛容 (Integration of Bipolarity)	15. 私は友人に対して友好的な感情だけでなく、 イヤな感情も出している。(＋) 16. 私にとって、おろかで面白味のない人もいる。(＋) 17. 理想像を求めることが悪い結果をもたらすこともある。(＋)
⑦独立性 (Separateness)	18. 他の人が知っている私と、本当の私とは違う。(－) 19. 私はときには友人から離れて一人で過ごすことが好きである。(＋) 20. 私は自分の気持ちを表現する最上の方法として 沈黙することがある。(＋)
⑧強迫 (Obsessiveness)	21. 何事も完全にやらないと気がすまない。(－) 22. 私は完璧でなくても満足できる。(＋) 23. 私はどんなことがあっても、 約束は守らなければならないと思う。(－)
⑨自己志向 (Self-directedness)	24. 私は怒りを表現するのに抵抗を感じる。(－) 25. 自分の気持ちよりも、他の人の気持ちを察することの方が 大切であると私は思う。(－) 26. 私は自分の気持ちにしたがって物事を決めることが多い。(＋)
⑩自分の弱点の受容 (Acceptance of Weakness)	27. 私は友人の前で自分の弱点をだせない。(－) 28. 私は自分の弱さを素直に認めることができない。(－) 29. 私は自分のミスを受け入れることができない。(－) 30. 私は他の人からの批判を素直に聞ける。(＋)

注) (－)は逆転項目である。

親子関係診断尺度 EICA (中学生用)

	番号	項	目
情緒的 支持 (Emotional Support)	1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10.	私の言うことに耳を傾けてくれる。 心配ごとをじっくり聞いてくれるので私の気持ちが楽になる。 私のなやみや心配ごとを理解してくれる。 私が困っているときには元気づけてくれる。 私には友達がとても大事だということを理解してくれる。 いつも私の考えや意見に耳を傾けてくれる。 いっしょにいと気持ちが楽になる。 私といっしょに仕事をするときは私の意見を聞いてくれる。 私がどんな物の見方をしているのか理解しようとする。 私が喜ぶ本や雑誌を買ってくれたり学校で役立つことを教えてくれたりする。	
自律性 (Autonomy)	1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10.	好きなだけ外へ行かせてくれる。 夜や週末は私の好きなように過ごさせてくれる。 私の行きたい所ならどこへでも何も聞かずに行かせてくれる。 私が外へ行くとき何時に帰らなさいとは言わない。 なんでも私がしたいようにさせてくれる。 学校が終わった後は私の好きなことをさせてくれる。 夜でも私が行きたいときはなん時でも外へ出してくれる。 私がしたいことはどんなことでもさせてくれる。 私のやりたいときに宿題をやらせてくれる。 私が友達の家に一晩泊まるのを許してくれる。	
同一化 (Identification)	1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10.	ほかの誰よりも私といっしょにいたがる。 私が大きくなって家の外で過ごす時間が増えてきたことを残念がっているようだ。 私に暇なときはたいていいっしょに過ごしてほしいと思っている。 暇さえあれば私に話しかけたり私といっしょにいたがる。 私にいろいろ気を使っている。 私のことが好きだということを態度で表わすべきだと思っている。 私にたびたびほほえみかける。 私を喜ばそうとしていろいろなことをする。 友達と出かけるよりも私といっしょに家にいる方が好きだ。 いつも私を喜ばすことを考えている。	
統制 (Control)	1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10.	いつも私の性格を改めさせようとする。 私がいいつけ通りにするまで私を自由にさせてくれない。 「どうしてそんなことをしたのか説明しなさい」としつこく言う。 私が家の手伝いをしないと腹を立てる。 私が何をすべきかいつも私に指図したがる。 私が年長者に口答えするのを許さない。 私のためにたくさんのきまりや規則を作り家の秩序を守ろうとする。 私に何かいいつけるとそれを守るまでやかましくいつて聞かせる。 私が学校の勉強や家での雑用をなまけると私を罰するのを当然のことだと思っている。 私が悪いことをすればすべてなんらかの方法で罰しなければいけないと思っている。	